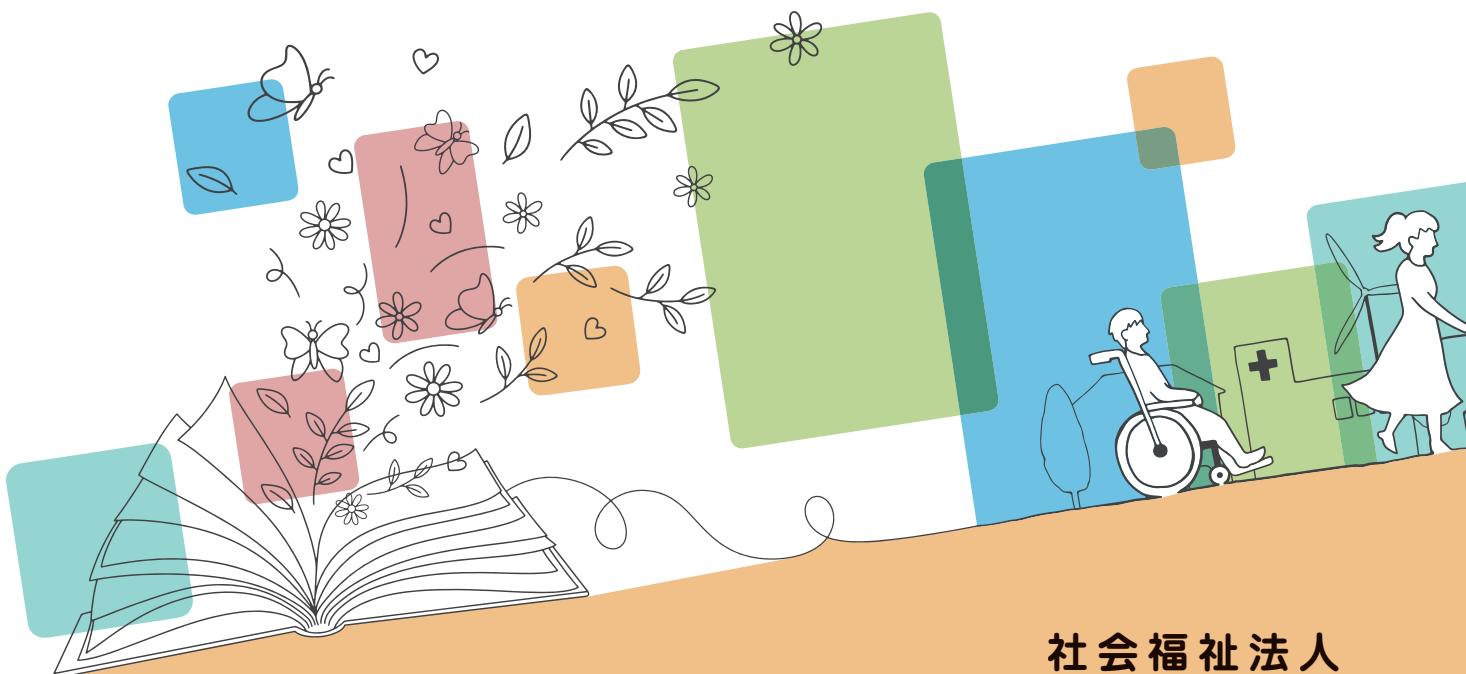


令和7年度

福祉作文

WELFARE
COMPOSITION



社会福祉法人
赤穂市社会福祉協議会

今、必要とされる地域の「つながりづくり」

社会福祉法人 赤穂市社会福祉協議会

理事長 児嶋佳文



国民の5人に1人が後期高齢者の超高齢社会を迎える、雇用、医療、福祉といった社会の広い領域に深刻な影響を及ぼす「2025年問題」の年になりました。市民の抱える生活課題、福祉ニーズは多様化とともに複合化・深刻化し、家族や社会保障だけでは補えない部分を地域で支え合う重要性が注目され、大きな期待が寄せられています。

社会福祉協議会では、地区別懇談会等を通じて市民の皆さまの声を直接お伺いしながら、人とひと、人と地域のつながりを大切にし、共感と思いやりをもつて、支えあい助けあう地域づくりの支援に取り組み、誰もが住み慣れた地域でいつまでも安心して暮らせる福祉のまちづくりに努めています。

中でも、次世代を担う子どもたちの福祉教育の推進は特に重要であり、従来から赤穂市や学校園はもとよりボランティアの皆さんと連携を図りながら、心のふれあいと思いやりが体感できる福祉教育の推進を図つており、今後さらにそれらの取組みを充実させてまいりますので、これまで以上のご協力を賜りますようよろしくお願ひいたします。

本年度も福祉の問題は「地域で暮らす方の身近な課題である」ということを認識していただくため、「福祉作文」を募集しましたところ多くの作品の応募があり、いずれも心に響く作品でしたが、その中から優秀作品を選び、「赤い羽根共同募金」の配分金をもとに文集を作成いたしました。

この文集が大勢の皆さまの目に留まり、お互いを思いやり、助け合い、大切にしようとする気持ちが社会に広がり、本市の地域福祉が向上することに少しでも役立てれば光榮です。文集の発行にあたりまして、作品を応募していただきました皆さん、ご指導、ご協力をいただきました学校関係者の皆さんに深くお礼申し上げます。

令和7年12月

福祉作文

小学生の部

もくじ

佳作	だいじな事と、だいじな人	わたしの妹	人生100年時代	だれもが笑顔になれる社会	高れい者がこまること。それにたいしてわたしたちができるこ	やつてよかつたことやつてもらつたこと
佳作	車いすで万ばくへ 気持ちを大切に	だいじな事と、だいじな人	わたしの妹	人生100年時代	だれもが笑顔になれる社会	高れい者がこまること。それにたいしてわたしたちができるこ

赤穂小学校六年	赤穂小学校三年	塩屋小学校五年	塩屋小学校六年	御崎小学校六年	塩屋小学校六年	塩屋小学校五年	御崎小学校六年	塩屋小学校五年	塩屋小学校六年	赤穂小学校六年	城西小学校三年	塩屋小学校六年	赤穂西小学校五年	尾崎小学校四年	御崎小学校六年
---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	----------	---------	---------

網本花菜	加藤花菜	平島唯乃杏	有吉結莉	頓田弘	宮瀬莉奈	鎌倉実広	田中千愛	前花夏	仲夏	田中花夏	前花夏	仲夏	田中千愛	前花夏	仲夏
……	……	……	……	……	……	……	……	……	……	……	……	……	……	……	……
14	12	11	10	9	7	5	4	2	1	14	12	11	10	9	7

中学生の部

将来の夢
ふつうにくらす幸せ
手話は、むずかしい
百年生きた大きいばあちゃん

大賞

姉が教えてくれた福祉の心

特選

障がいを身近に感じて

入選

温かい社会に

福祉についてもう一度

佳作

お兄ちゃんの右腕

かけがえのない命を守るために生きるということ

支えられて生きるということ

高齢者これからのかの未来

坂越小学校四年	高雄小学校五年	有年小学校五年	原小学校四年	赤穂西中学校二年	赤穂中学校二年	赤穂東中学校三年	赤穂中学校二年	赤穂中学校一年	赤穂西中学校三年	赤穂東中学校二年	坂越中学校一年	有年中学校三年
---------	---------	---------	--------	----------	---------	----------	---------	---------	----------	----------	---------	---------

小花	平前古	三小野	戸室	武梨	松	大河							
河崎	田川	宅優月	川井	内	本	原							
拓夢	蒼京斗	美結	莉	映	太郎	海							
空	優真	よつ葉	緒	空	馬	來							

38	36	34	33	31	29	27	25	23	20	19	17	16
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

高校生以上の部

大賞

弟と成長する上で気付いたこと。

特選

温かい目で

入選

福祉

思いやりのある社会

佳作

ひいおばあちゃんからもらった夢

赤穂高等学校一年

進藤そら

一般

西山千賀子

赤穂高等学校一年

角南奈

赤穂高等学校二年

入潮圭祐

赤穂高等学校二年

内藤真白

...

47

...

45

...

44

...

42

...

40

※ 「障害」や「障害者」などの「害」の字はひらがな表記にしています。
ただし、法律名については漢字表記にしています。

小学生の部 大賞

障がいと向き合ひ

塙屋小学校五年 仲 前 花 夏

私は、九才上のお兄ちゃんがいます。お兄ちゃんは、生まれた時から耳が聞こえません。そして、重度知的障がいと自閉症スペクトラムという障がいもあるため、話すこともむずかしいです。

私は、生まれた時からこのお兄ちゃんが障がいとか関係なく、ふつうにお兄ちゃんと思っています。

お兄ちゃんとの生活は、今改めて思うととても大変です。お母さんはお兄ちゃんが小さいころから病院や、訓練に連れて行つたり、コミュニケーションがむずかしいので写真や絵カード、簡単な手話やジエスチャーでやりとりしてきました。私は、いっしょに住んでいて私が伝えたいことがなかなか伝わらなくてイライラしてしまうこともあるけど、お兄

ちゃんは自分がしゃべれなくて伝わらなくて、もつとイライラしているんだろうなと思います。でも最近は、私や家族の顔、表情を見ておもしろい顔をしてきて笑わそうとしてしたり、なにか私にしてほしいことがあれば物を持ってきて、要求してきてお兄ちゃんなりにコミュニケーションをとろうとがんばっています。私は、そんな時お兄ちゃんは話すことができないけど大体何を伝えようとしているのかすぐ分かりります。

私にとつて障がいとは、そんなに特別なものではありません。お母さんも言つていましたが、「障がい」という言葉は、あまり好きではありません。なぜかというと、その言葉でふつうの人と障がいをもつている人と差別しているように聞こえるからです。アメリカでは、「チャレンジド」という言葉があつて、挑戦という使命や課題、チャンスを与えた人という意味をもつていて、障がいがあるからこそ体験する様々な事を、自分のため社会のためにポジティブに生かしていくという考え方であり、私はアメリカに限らず世界でチャレンジドという言葉や考え方

が広まつてほしいと思います。

お兄ちゃんと生活して、まだまだ大変なことはたくさんあるし、たまにふつうに話せるお兄ちゃんがいいなと思うこともあるけれど、私は、ふつうでは学べないことを、お兄ちゃんから学ばされているなと感じます。だから外で困っている人を見かけたら、まよわずに声をかけて、助けてあげたいと思います。そして、これからもお兄ちゃんやお母さんを助けていけたらいいなと私は思います。



小学生の部 特選

寄りそつ気持ち

御崎小学校六年 田 中 千 愛

私の身近な知り合いに自閉症スペクトラム障がいの男の子がいます。

会った時に、車の車輪やサークュレーター等の回転する物に目線の高さを合わせて、何分もずっと集中して見ている事がたが印象的でした。私はまだ障がいがある事を知らなかつたので、「不思議な子だな」「何が楽しいんだろう」と思いながらじつと見ていました。私があまりにも不思議そうに見ていたので、お母さんが、

「今どんな事思つてる?」

とたずねてきました。

「何で、あんなに回る物ばかりに興味を持つて下から転んで見たり、ニコニコしながら長時間見ている

の？何か独特じゃない？」

と正直に不思議に思つた事を言つてみると、その子が自閉症スペクトラム障がいだという事を教えてくれました。聞いた事がある名前だった事とドラマで見たことがあつたので、深く知りたくさんありました。

一日一緒にいる事があつたので、よく見ていると、大きな音が苦手でヘッドホンをつけて生活していました。決まつたご飯しか食べれなかつたり、歩く場所や一日の流れが同じだつたりして、私は一日の中でこんなにも色々な事にこだわりがある事を、すごいなと思いました。困つてている時に私にできる事は何かないかなと考えてみましたが、落ちつき方も場所や人など、同じ流れがある事を知りました。その子とその子のお母さんを見ていると、毎日の流れとちがう流れになりそうな時には、事前に今日の予定を何度も知らせていました。自閉症だけでは無いけれど、その子の周りにいる人も、その子が心地よく過ごせるように環境を作つたり、あらかじめ特性を伝えたりして、『すごいな。安心して過ごす事ができるのは、周りの人のやさしさがあるから

なんだな』となみだが出そうになりました。

もしこれから先、自閉症や障がいをもつた人と身近にふれ合う事があれば、私はその人の事を何が好きなのか、どんなこだわりがあるのか、苦手な事はどんな事なのか、たくさん知つていきたいと思うし、心地良く安心して過ごせる環境を作れる人になりたいと思います。

そして同じ学校や同じクラス、地域でも、障がいをもつていてるから過ごしにくいと思わなくとも良いように、周りのみんなが温かく見守る事が出来たり、困つている時にはさりげなく手をさしのべられたりするような社会になつたらいいなと思います。

もし私がまたその男の子と一緒に遊ぶ機会があれば、その子の事やお母さん、周りの大人がどんな時にどう関わっているのかや、どんな言葉をかけているのかをよく見て知つていきたいです。

私も、自分の事を知つてもらつたり、困つている時に周りの人気がやさしくしてくれたらうれしいので、障がいがある、ないにかかわらず、みんなが笑顔で過ごせるように、やさしい気持ちをわすれずにいたいです。

小学生の部 入選

車いすで万ばくへ

赤穂小学校三年 鎌倉 実広

わたしは、夏休みに、家ぞくと万ばくに、行きました。

わたしは今びょう氣で、足がいたくて、歩けないので車いすにのつて万ばくに行きました。

駅について、かいさつを通る時に車いすが通れないでので、みんなより広い所を通りました。ホームに上がるかいだんも、わたしはエレベーターで上りました。電車にのる時は、たくさんの人があつたので、わたしのがのるスペースを作つてくれたり、お父さんが車いすをおしてくれたりして、たくさんの人のかよう力で、のることができました。

ゆめしま駅では、今までに、見たことないぐらい人がいて、びっくりしました。万ばくへ行くエレベー

ターも人がたくさんならんでいて、のるのにもとても大へんでした。万ばくへ着くまでの電車の中や駅では、歩ける時とちがつてのる時に大へんだつたり、人にめいわくをかけてしまい、すみませんと、いう気持ちになつてしましました。

しかし、ふしぎなことに、スペースをあけてくれたり、手つだつてくれた人たちがいたので、うれしいという気持ちと、ありがとうという気持ちで心がいっぱいになりました。

万ばくに着いて、どこに行けばいいかわからずこまつていると、

「車いすの方は、こちらです。」

と、スタッフの方が、やさしく声をかけてくれて、とても安心しました。

会場に入つて一番にテレビで見たことがある大やねリングが目にはいりました。

テレビで見るよりげん実で見ると、大きくて、すごいな」と思いました。

マレーシアのパビリオンでは、二かいだつたので、

と、お母さんと話していると、

「車いすでも行けますよ。」

と、スタッフの方が教えてくれました。

「わたしも、みんなといっしょに入れるんだ。」

と、うれしくなりました。

みんなどちがう入口からエレベーターで上りまし

た。中では、車いすが入れるぐらい広かつたので、
人にぶつからずに行くことができました。

いろんなパビリオンに行けたけれど、どのパビリ

オンも

「車いすで入れますよ。」

と、言つてくれたので、うれしかつたです。

帰りの電車にのる時は、はしに行けるように、お

兄さんが場所を空けてくれました。また、電車をお

りる時は、お姉さんたちがホームに一どおりて、道

をあけてくれたので、おりることができました。

ホームから、エレベーターでかいさつにおりました。その時に、男の人がわたしがおりる時に、あけ
るボタンをおしつづけてくれました。

ふだん車いすの生活では、できないことが多いの

で、万ばくでもあまりできないのかな?と思つてい
たけれど、たくさんのが体けんできて、とても
楽しかつたです。

今日一日手つだつてくれたり、教えてくれたたく
さんの人に、感しやの気持ちでいっぱいです。あり
がとうございました。

この感しやの気持ちをわすれず、足がなおつたら、
町や電車の中でこまつている人がいたら、声をかけ
たり、たすけてあげたいと思います。

気持ちを大切に

塩屋小学校六年 花 崎 有 飛

ぼくが、五年生の時、サッカーの試合中に起こつ
たケガで手首を骨折してしまいました。

今までに、シーバー病、しつがい骨だつきゅう、
オスグット病などサッカーをしていてケガをするこ
とはたくさんあつたけど、骨折ははじめてで、とて

も痛かったのとギプスにびつくりしました。それよりも不安が大きかったです。なぜ不安があつたかと いうと、学校行事の自然学校が二週間後にあつたからです。

自然学校へ行くまでは、みんなと同じように活動出来なかつたらどうしよう。お風呂や着替えで時間がかかってしまいおくれてしまうかもしねい。大きくおもい荷物を全部自分で持てるのかと不安ばかりでした。

そんな不安がいっぱいの時に担任の先生が声をかけてくれました。「できないこともあるけれど、できることを考えて一緒に活動しよう。」と言つてくれました。

また友達が

「荷物持つたるからな。」

と何人も声をかけてくれたり、お母さんがお風呂に入れる時にギプスに水がかからないよう一人で簡単に出来るように工夫してくれたりして、不安がうすれてだんだん楽しみに変わっていきました。

自然学校では、みんなと同じように活動し、かく れ家作りや、はんごうすいはんでは、出来ない所は友達が助けてくれて、ぼくが出来る事をやらせてく れました。

一番心配だつたお風呂や着替えも班の友達が助け てくれて時間に間に合う事が出来ました。

先生や友達にたくさんサポートをしてもらい、四 泊五日を楽しむことが出来ました。

ぼくのケガは約三ヶ月くらいで治り元の生活にも どつたけど、この三ヶ月がとても長く感じました。 それは、思うように出来なかつたり不便だと思う事 がたくさんあつたからです。

ぼくは、この三ヶ月でたくさん学びたくさん成長 したと思います。

前に学校で車いすやアイマスクなどの福祉体験を しました。その時は体験してみて不自由な気持ちを 分かつた氣でいたけど、自分が骨折し、ふつうの生 活をしてみて、いつもしていることがすぐに出来な かつたり、助けてもらわないと出来ないなどとて も不便で思つていた以上に大変だと気づいたから

です。

困った時に助けてもらつたり、声をかけてもらえる事がこんなにも心強いことなんだと知りました。またどうやつたら一緒に出来るのか考えててくれたり、ぼくの気持ちに寄りそつてくれた事がこんなにもうれしい気持ちになるんだと知りました。

ぼくは、これから困っている人がいたら、自分から声をかけ助けてあげたい。またその困っている人の気持ちに寄りそつて一緒にサポート出来るようになりたいと思いました。

ただ助けるだけではなく、相手の気持ちを大切にし、それに寄りそう事が一番福祉に大切な事ではないかと、ぼくは体験して思いました。

私は、幼稚園のとき、車いすの経験があります。5さいの時、病気になりました。

その病気の名前は、「ペルテス病」です。

この病気を調べると、小児期の大腿骨頭に発生した血行障がいにより、骨頭の壊死が生じ、股関節に痛みを来たす病気です。

ペルテス病では、股関節の痛みは、ゆっくりと増悪しますが、早期に治療介入をしなければ永続的な障がいを残すこともあります。

私は、とてもこわくなりました。

このさき、いつしょ、車いす生活か、はしれないのかと、とつてもふあんになりました。でも、家族がよりそつてくれました。

小学生の部 佳作

だいじな事と、だいじな人

赤穂小学校六年 宮 本 世莉奈

とくに、おかあさんは、幼稚園のときから小学生

まで、どんなときでも、そうげいしてくれました。

ちいさいときのことは、おもいだせないけど、い

まおもえは、おかあさんのたいへんさや、ありがた

みがわかります。

おかあさんがいそがしい時は、おにいちゃん一人が、そうげいしてくれました。

おにいちゃんたちは、私が小さいときからあそんでくれたり、おもたいにもつをもつてくれたりしていました。

いまは、車いすにのらなくてもいいし、はしれるようになつたけど、たまに、また同じことになつたらどうしようとおもうことがあります。

そんな時は、家族のことを思いだします。

ふあんになるけど、家族がいると思うと、ぜつたいにたすけてくれると信じているからです。

そんな家族を大切に思います。

だから私も家族の人がたいへんなときは、たすけていきたいです。

たとえば、私が今していることは、かじのてつだ

いです。

せんたくものをほしたり、たんぱたりします。

しょくじのあとのおさらあらいもします。

いまからかじのてつだいをしていれば、しょうらいとでもやくにたつとおもうし、家族もよろこびます。

まだまだ出来ていないこともあるけど、車いすのないせいかつをありがたくおもつて、これからいろいろなことをおぼえていきたいとおもいます。

わからなきことは、すぐに家族にそうだんします。

私は、サッカーをしていて、ケガも多いので、それもこれから気をつけていきたいとおもいます。

家族がささえあつていけるくらしをよくかんがえて、それをこうどうに、うつしていきたいとおもいます。

わたしの妹

城西小学校三年 頇 田 莉 緒

わたしの妹は、なんちゅうなので耳が聞こえない
ので、いつもほちゅうきをつけています。

なんちゅうとは、生まれた時から耳が聞こえない
人と、とちゅうから耳が聞こえなくなつた人がいま
す。わたしの妹は、生まれた時から聞こえなかつた
ので、ほちゅうきをつけてみんなの声を聞いていま
す。ただみんなの声が、いつもせいいかくには聞こえ
ていないので、手話も使ってお話をしています。

手話は、手を使ってお話をするものです。手話を
使うことで、お話をせいかくにつたわりやすくなり
ます。

わたしの妹は、手話などいろいろなことをべん強
するために、ひめ路ちゅうかくとくべつしん学校
にかよっています。そこでは、ようち園から高校ま
であります。わたしもたまに一緒に行く時もあります。
その時になんちゅうや手話について学んでい

ます。

妹とちがつてわたしは耳が聞こえるので、妹は、
話をちゃんと聞けていなくてこまつてていると思いま
す。だから手話を使つたり分りやすい声でお話をし
ています。妹が聞きとれなかつた時は、ちゃんとし
た言いかたにかえて教えてあげています。おふろの
ときは、ほちゅうきが水にぬれたらこわれるので、
ほちゅうきをはずしているので、大きい声で話をす
るようにしています。

みんなもほちゅうきをつけている人を見たら大き
すぎる音はうるさくてビックリするのでふつうの声
で話しかけてください。そして後ろから話しかけら
れてもきづかないときもあるので、そばにきて、か
たをやさしくとんとんとたたいておしえてあげてく
ださい。目を見て話してくれたら分かりやすいです。
なんちゅうの妹は、聞こえにくいだけで、お外で
あそぶこともすきだし、おしゃれする事もすきだし、
お友だちとあそぶ事もすきです。ほちゅうきをつけ
ている人を見かけたら少しきにかけてください。

この前、妹の学校でなかよしこうりゅう会があり

ました。なんちようの子となんちようじやない兄弟

が集まつてあそぶ会がありました。耳が聞こえないのもかんけいなく楽しそうに遊んでいました。妹いがいのなんちようの子と一緒にゲームになつて、ゲームをしました。こまることなくゲームを楽しむことができました。

さいしょは手話ができなくてもなかよくなれるからなかよくなつてほしいです。

これからわたしは、手話や大きい声で話すことを心がけていきたいです。
それから学校では、手話がかりなど、手話をひろげていきたいです。

なんちようの子だけじゃなく車いすの人や目が見えない人などを見かけたら、たすけてあげたいです。さいごに、妹とこれからもけんかもすることもあると思うけど、一人でたすけあいながら楽しく、おもしろくなかよくしていきたいです。

人生100年時代

塙屋小学校六年 有吉孝弘

「人生100年時代」という言葉を知りました。長生きする人が多くなり、100歳をこえても元気なお年寄りが多くなつているそうです。

長生きはとてもいいことですが、長生きすればするほど、体も年を取るので、目が見えにくくなったり、耳が聞こえにくくなつたり体が動きにくくなつたりするのだろうなと思います。ほかにも、忘れやすくなつたり、同じことを何度も言つたりすることが増えてくると思います。

ぼくもお年寄りと話していく、「あれ？さつき話したけどな？また同じこと言つた」と思つてしまふこともあります。長く生きればだれでもそういうことが出てくるだろうと思います。

そんな時に自分はどうしたらいいのか考えてみました。同じことを何度も言うのは、大事なことをちゃんと覚えておきたいからだと思います。でも、

なかなか覚えられないからあせつたり不安な気持ちになつてゐるんだと思います。もし何度も同じことを聞かれることがあれば、不安な気持ちをやわらげるために「ぼくが覚えているからだいじょうぶだよ」

と声をかけたり、メモを渡してあげたいと思います。

ふだん、なにげなく遊びに行く時も、何か様子がおかしいなと思うお年寄りがいたら、もしかしたら、家に帰れなかつたり、困つてゐるかもしないので、一人では心配だけど友達と一緒に「どうしたんですか」と声をかけたり、近くの大人に伝えたいと思います。

声をかけるのはとても勇気がいることだけど、ちよつとの勇気でだれかを助けることができるかもしません。お年寄りがたくさん増えてるので、ふだんからみんなで気にかけて、困つたことがあれば声をかけあつたり見守つたりできればいいなと思います。

お年寄りも子ども、大人も、みんなが安心して楽しく笑顔で暮らせるように、相手の気持ちを考えながら、行動していきたいと思います。

だれもが笑顔になれる社会

赤穂西小学校五年 平 島 結 莉

去年、旅行に行つた時に、ヘルプマーク・ヘルプカードを見かけたので、どういうものなのか、どういう人がつけるのか気になつたので、調べました。

ヘルプマーク・ヘルプカードは、救助や援助を必要としている方がもらえるカードらしいです。例えば、内部しようがいの方・にんぶ初期の方・義手の方・がんや難病などの病氣がある方・パニック発作などのしようがいがある方など様々です。ヘルプマーク・ヘルプカードをもらえる場所は、各都道府県のきめられた窓口で配布してゐるようで、都道府県や市区町村しようがい福し課などの他、保健所や保健センター、市民センター、しようがい者相談センター、公共交通機関の各駅、東京都の場合は都立病院などで配布してゐる場合もあるそうです。ヘルプマーク・ヘルプカードは、何かしらの理由でもらいに行けなかつたり、自治体が郵送に対応していな

かつたりする場合は、ヘルプマーク・ヘルプカードを自作することが可能だそうです。東京都福し保健局などのWEBサイト上から、「ヘルプマーク画像」をダウンロードしてから紙に印刷してつかえるそうです。事情があつてもらいに行けない人にも、利用できるようになつていてとてもいいと思います。

赤と白のヘルプマーク・ヘルプカードは、「助けて」といういみだけど、緑と白のヘルプマーク・ヘルプカードは、「助けたい」や、「困つている人の助けになります」などの、逆ヘルプマーク・逆ヘルプカードで、困つている人を助けたいという意思表示をするためのマークだそうで、ヘルプマーク・ヘルプカードとは、反対の役割を担うそうです。ヘルプマークは、「助けてほしい」という意思表示に対して、逆ヘルプマークは、「困つた人がいたら、助けますよ」という意思表示だそうです。逆ヘルプマーク・逆ヘルプカードをつけている人だつたら、たよりやすそうですね。わたしは、ヘルプマーク・ヘルプカードをつけている人を見かけたら、席をゆずつたりして、ヘルプマークをつけている人を助けたい

と思います。周りの人が逆ヘルプマーク・逆ヘルプカードをつけている人が多くなるととてもいいと思いました。

高れい者がこまること。

それにたいしてわたしたちができる」と

尾崎小学校四年 加藤 唯乃杏

私には、80才をこえるひいおじいちゃんとひいおばあちゃんがいます。身近に見ていて思うことを今回の高れい者が困ることと合わせて書いていきます。

ひいおばあちゃんは、ほぼ毎日畠に行きひいおじいちゃんの手伝いをしたり、家のことをしたりして生活しています。そんなひいおばあちゃんですが、こしとひざが曲がっています。歩くのがとてもゆっくりで外では、つえやシルバーカーをおして動いています。家の中では、かべや家具をさわって支えに

しながら歩いています。また立ち上がるのにいつも時間がかかり、辛そうにしています。

次に高れい者が困る場面を考えてみます。私は、4年生になり授業で高れい者体験をしました。おもりを付けゴーグルをかけ高れい者になつた気分でつえをついて学校内を歩きました。こしやひざが曲がつたじょうたいでは、とても歩きづらかったです。またゴーグルでかなりしかいも悪く不安になりました。しかしつえやサポートしてくれる友達がそばにいてくれたのでなんとか学校内を歩くことができました。特に階段は目が見えにくいこととなれない体にとてもこわかつたことをおぼえています。一段でもふみ外すと転びそうになりました。じつさい高れい者は、目も見えづらく足こしがとても弱ると聞きました。普段の歩くことだけでなく階段は、かなりむずかしくなると感じました。

身近なひいおばあちゃんの様子や高れい者体験で感じたことから、他にどんな困りごとがあるのか考えてみました。例えば、こしが曲がつたじょうたいだと高いところにある物が取れないと、逆にゆか

にある物も取りづらいことがうかびます。重たい物を持つこともむずかしくなつていくだろうし、歩くスピードはゆつくりになると学びました。

他にも、目が見えづらい人などは家の中でも、ついかたづけずおきつぱなしにしてしまつた物につまずいて転んだりけがをしてしまふことも想ぞうできます。耳の聞こえにくい人は外を歩いていても後ろから車や自転車が近づいていても気づくのがおくれそうだなと思いました。また、さい近ではひなんの放送が聞こえにくかつたり、実さいひなんとなると、早く動けなかつたりにげおくれてしまうのではなかと思いました。

私にできることは、家の中では使つた物はかたづけて、ゆかにはなるべく物をおかないようにすること、物を持つてあげたり取つてあげたりすること、話をする時は口を大きく開けてゆつくりわかりやすく話すこと、外では自転車をとめる時は歩行者のじやまにならないようにとめること、そして困つている人がいて自分が助けられないと思つたらお父さんやお母さん、もしくは近くの大人の人に助けをも

とめることができると考えました。

みなさん!! 高い者が困っていたら見て見ぬふり

をせず積極的に声をかけていきましょう。

さい後に、大好きなおじいちゃんおばあちゃん、いつもありがとう、長生きしてね。

やつてよかつたことやつてもひつたこと

御崎小学校六年 綱 本 花 菜

私は、「こんなことをしてよかつたな」と思うことがあります。それは、助けてもらつてうれしかつたことと、勇気を出して声をかけたこと、そして体験してよかつたことです。

最初に「助けてもらつてうれしかつたこと」についてです。これは二つあります。一つ目は、一年生のとき、地区別にあつまつて私の地区は教室移動を行いました。そのとき私は、ふで箱をおとしてしまった。どの教室にいつていいか分からなくなつたとき、

六年生の人が

「この教室だよ。」

と、つれていつてくれました。このとき、ちゃんとお礼を言えなかつたかもしれませんのが今、ふと思うと感謝の気持ちでいっぱいです。

二つ目は、こつせつをしてしまつたとき、クラスのみんなが手助けをしてくれたことです。給食のおぼんを運んでくれたり、そうじの手伝い、ランドセルをしまつてくれたりしてくれました。そして、数週間後、こつせつが治りましたが、この時も、みんなへの感謝の気持ちを言葉に表せていません。

次に「勇気を出して声をかけてよかつたこと」についてです。それは、家族のみんなで買い物にいつた帰りに前を通つたおばあさんの荷物から紙がおちました。けれどもだれもひろう人はいません。だから、私が紙をひろつてわたすとおばあさんは

「ありがとう」

といつてくれました。きんちようしたけれど勇気を出して声をかけてよかつたと思いました。

次は、「体験してよかつたこと」についてです。

私はある日、車で体験しせつにいきました。そこは、

パティシエや消防士、職人や医者などの体験ができるしせつです。私は弟といつしょにパティシエや消防士、ペイント屋の体験をしました。パティシエの体験ではクリームを使つて自分のケーキを作りました。ここで弟は何度もゆかやかべ、口をさわるので十回くらい手洗いをやり直しさせられていきました。ペイント屋ではよごれてもいい服にきがえて、かべに絵の具をローラーでつけることをします。消防士の体験では、じつさいに消防車に乗り、防火服をきてしせつを走り、火を消火器で消すことをしました。どの体験も、しょうらいのことを考えると、やつてよかつたなと思いました。だれかの役に立つために、社会にこうけんできる大人になりたいと思っています。

最後は「障がい者」についてです。障がい者的人はみためではわかりにくい人もいるのでふつうの人とまちがわれる人もたくさんいるそうです。そして私が特にこれはどうなのか、と思ったことは、電車でおとしよりや障がい者がくるとゆずるルールのあ

る「ゆうせん席」についてです。

私はあまり電車にのつたことはありませんが、本でおとしよりが立つているのにねたふりをしている大学生やゆずらない人もいるという内容を読んだことがあります。おとしよりや障がい者が近くにいるのにねたふりや、スマホみてわざと気づかないふりをして席をゆずらない人がいることが書いてあり、これをなくしたいと思いました。そして、障がい者の人やおとしよりの人たちが電車に乗ってきたら、席をゆずつてあげたいと思いました。

自分にとつてあたりまえのことが相手にとつてあたりまえではないことで差別やいじめがおきているけれど、あたりまえではないからいじめる、差別する、このあたりまえは人によつてちがうから、いじめたり、差別したりすることは理由にならないと思いました。自分の体験や助け合つてることでこの社会は成り立つていると思いました。

将来の夢

坂越小学校四年 大河 旭

かけをしました。

私は、将来ガイドヘルパーの仕事につきたいと考えています。ガイドヘルパーとは、移動介ご従事者

とも言い、全身障がいを持つ方、視覚障がいを持つ方、知的障がいを持つ方など、一人で外に出るのが困難な方について、必要なサポートや介助を行う人の事です。

なぜ、ガイドヘルパーの仕事にきょう味を持つたかと言うと、四年生になり、学校で、視覚障がいに関する体験学習があつたからです。体験学習では、目が見えない役の時は、アイマスクで視覚をさえぎり、ガイドヘルパー役の人々に支えてもらひながら学校の中を歩きました。目が見えないと、真っ暗でどこに何があるか、分からなくて、とてもこわかつたです。ガイドヘルパー役の時は、目が見えない役の人々を支えて、こけたり、けがをしたりしないように、どうしたら分かりやすく伝えられるか考えながら声

点字学習では、点字の書き方と、読み方を教えてもらいました。他にも、実際に点字を読んだり、書いたり、家の中には点字がないかを探したりしました。点字はとても難しくて、覚えるのが大変だなと思いました。

家の中では、点字が書いてあるものがなかなか見つからなくて、もし本当に目が見えない人だとしたら、どうやって、暮らせば良いのだろうとこわい気持ちになりました。ふりかけの「ゆかり」に点字があるんだ！目が見えない人のことも考えて、ふりかけを作つていて「ゆかり」を作つている会社はすごいなと思いました。

視覚障がいに関する体験を通じて、一番思つたのは、「怖い」と言うかんじようでした。怖くて、どうしたらいいのか分からぬ時に、ガイドヘルパーの人に声をかけてもらつたり、体を支えてもらつたりして歩くとともに安心しました。

「ふ」つうの「く」らしの「し」あわせとはなにか考えた時、私は、「安心して暮らすこと」がど

ても大切な事だと思います。私はふだん、目の見えない生活を送っているので、本当に目の見えない人の気持ちは、アイマスクで体験をしただけでは分からぬかもしれません。もっと怖いのかもしれないし、怖くないのかもしれません。点字も同じで、目が見えない人にとっては、難しくないかもしれません。私には、想像することしかできないけれど、手伝ってくれる人がいたら、少しでも安心して生活できるのではないかと考えました。だから、ガイドヘルパーと言う仕事について、目が見えない人が安心して、生活できるように、お手伝い出来ればいいなと考えました。

将來ではなく、今の自分にできる事はないかなと考へてみました。町の中を歩いていると音が鳴つている信号を見つけました。でも、この音が鳴らないと、今、青なのか、赤か目が見えない人にとっては分からないので、もし音の鳴らない信号機の前で目の見えない人がこまっていたら、「今、青ですよ。」と言つておしえてさしあげようと思います。他にも、ガイドヘルパーになつて、外国の方をかいごするかもしないので、今、英語などを勉強して、いつか外国の方をガイドする時にやくだてるため、英語を勉強しておこうと思います。

みんなが「ふ」つうの「く」らしの「し」あわせを感じられる社会になればいいなと思います。私は、この世界にいる目が見えない人たちのふだんの暮らしを少しでも明るく、楽しくする、ガイドヘルパーを目指してこれからもがんばろうと思います。

ふつうにくらす幸せ

高雄小学校五年 松 原 海 来

ぼくは八人家族です。父、母、二人の兄、おじいちゃん、おばあちゃん、そして九十四さいのひいおばあちゃんと暮らしています。

ひいおばあちゃんは足やこしがよわく、つえをついて歩いています。週に四回、デイサービスに通つていて、それが生きがいになつていています。

ある日ぼくは、福祉の仕事をしている父に「福祉つてなに?」とたずねたことがあります。父は「ふつうにくらすしあわせのことだよ。」と教えてくれました。そのときはあまりわからなかつたけれど、今は少しづつわかるようになりました。

ひいおばあちゃんは「家族にめいわくをかけたくない。」「ずっとこの家でくらしたい。」と話しています。でも家は入り口まで階段があり、上がるのが大変です。手すりにつかりながら、ゆっくりと上がっています。家の中にも、お風呂やトイレ、ろう下に手すりがありますが、ドアの開け閉めがむずかしいところもあり、気づいたときは手伝っています。「みーちゃんありがとうございます。」と笑つて言つてくれると、ぼくもうれしくなります。おたがい笑顔になれて心がポカポカします。

ひいおばあちゃんには毎日の役割があります。それは洗たく物たたみです。デイサービスから帰つてきても、まず洗たく物をたたんでくれます。夏は部屋が暑いので、ぼくがエアコンをつけます。寒い日は暖ぼうをつけて部屋をあたためておきます。ひい

おばあちゃんは「ありがとうございます。」と言つてくれるけれど、いつもきれいにたたんでくれるひいおばあちゃんに、ぼくたちの方が「ありがとうございます。」だと思つています。

ある日ひいおばあちゃんが玄関でくつをはきかえるとき、よろけてしまつたことがあります。近くにいたぼくとお母さんはビックリして、あわてて手をさしのべました。そのあと家族で相談して、玄関に置ける腰かけ用のイスを買ってプレゼントしました。「くつがはきやすくなつたわ、ありがとうございます。」「くつがはきやすくなつたわ、ありがとうございます。」とても喜んでくれ、デイサービスでもその話をみんなにしていました。ひいおばあちゃんが喜んでくれて、ぼくもうれしくなりました。

以前、学校で「バリアフリー」や「ユニバーサルデザイン」について学びました。スロープや手すり、だれでも使いやすいトイレなどのことです。それを聞いて、ぼくは「うちの階段をスロープにはできなけれど、もつと手すりを太くしたり、階段にすべらないテープをはつたりすると、ひいおばあちゃんが安心して使えるな。」と思いました。

手助けをする前は「福祉」はむずかしいことだと思っていました。でも今は、家族や身近な人が安心してふつうにくらせるようになることが福祉だと思います。荷物を持ったりエアコンをつけたり、イスをプレゼントしたりすることも、みんな福祉の一つなのだと感じます。

これからも、ひいおばあちゃんがこの家でずっとくらせるように、ぼくにできることをしていきたいです。そして大人になつたら、町の人たちがみんな笑顔で「ふつうにくらすしあわせ」を感じられるようなお手伝いができる人になりたいです。

手話は、むずかしい

有年小学校五年 梨本丈太郎

ぼくは、8月に手話体験に行きました。地区の集会所でありました。参加人数は、あまり多くありませんでした。子どもは、ぼくと、弟だけでした。もつ

と子どもがいたらしいのになと思いました。手話を教えてくれた人は、3人で、大人でした。

まずは、自分の名前を手話で表しました。両手を使つて、できるだけ、大きく動かしました。話したり、字を書いたりして、自分の名前を伝えるのは、かんたんだけど、手話では、なかなか伝わりにくくて、むずかしいなと思いました。

次に、50音を手話で表す練習をしました。ぼくは、だく点を付けるのがむずかしいと思っていました。やつてみたら、あんがいかんたんで、すぐできました。そして、アルファベットを手で表す手話が多いことに気づきました。特に、「お」の手話が、手で丸を作るだけなのでかんたんだなと思いました。だけど、50音を全ておぼえるのは、むずかしいことだなと思いました。弟も、むずかしそうにしていました。そして大人の人もむずかしそうにしていました。

手話で歌を歌いました。先生は、口で歌いながら、手話でもやつていました。ぼくは、口と手一つを同時にすることは、むずかしいから、先生はすごいと思いました。また、耳が聞こえない人は、リズムがと

れないので、おぼえるまで時間がかかりそうだなと思いました。

口の動きだけで、何を言っているのか当てるゲームもしました。「うま」「くま」「くるま」は、すべて口の動かし方はいつしょだけど、意味は全然ちがうので、しつかり相手の口の動かし方を見ないといけないし、口の動かし方は、いつしょだから、読みとるのがむずかしいと思いました。なので、耳が聞こえない人と話すときは、できるだけ大きく、ゆっくりと、分かりやすく話すことを意識したいです。

耳が聞こえない人と、連らくするときには、インターネットを使った文章や、手紙などで、伝えます。そのときには、できるだけ短文で、マルやバツなどの絵文字を使い、分かりやすい文章で、相手に伝えるといいと先生がっていました。ぼくも、そんな友達ができたら、先生が言つたことを実行して、連らくをしたいです。

耳の聞こえない人は、電話も使えないし、パトカー やきゅうきゅう車の音が聞こえないから、災害が起 こつたときは、地いきのみんなの助けが必要だなど

思つたし、日常生活が不べんだなと思いました。

ぼくのまわりには、耳が聞こえない人は、いないけど、これから友達になるかも知れないから、もしこそしたら、この学習を生かして、仲良くなつていきたいです。

最後に、夏休みの手話体験に参加して、いい体験になつたので、もつとたくさんの人々に、参加してほしいし、ぼくと同じように、手話について勉強して、耳の聞こえない人を大切にし、仲良くしてほしいです。

百年生きた大きいばあちゃん

原小学校四年 武内映空

ぼくのひいおばあちゃんは、今年の五月に百さいで亡くなりました。太もものほねをおつて入院したあと、だんだんからだが弱っていきました。亡くなれる少し前まで、自分で歩いたりごはんを食べたりし

ていたので、まさか亡くなるなんて思つていませんでした。だからとてもさびしく、悲しくなりました。

ぼくは、ひいおばあちゃんのことを「大きいばあちゃん」と呼んでいました。みんながそう呼んでいたので、ぼくもしぜんにそう言つていました。大きいばあちゃんはやさしくて話しかけるといつもにっこりわらつてくれました。

大きいばあちゃんは、ぼくが生まれたころからデイサービスに通つていました。でも、元々は少し元気がなくて、家の中でじつとしていたこともあったそうです。だけど、デイサービスに行くようになってから、だんだん元気になり、人と話をするのが楽しくなつたと聞きました。

大きいばあちゃんは、スイカやぶどう、ももが大好きで、すしや焼肉もよく食べていました。自分でシルバーカードをおして、ゆつくりだけどしつかり歩いていたすがたが今でも目にうかびます。

ぼくは家が近かつたけれど大きいばあちゃんに会うのは月に一回くらいでした。会うとたくさん話しかけてくれて、ぼくのことをかわいがつてくれまし

た。でも、ぼくはゲームにむ中になつていて何回か話しかけられてもむししてしまつたことがあります。今思い出すともつと話を聞いてあげればよかつたなど心から思います。

ぼくが四さいのとき、大きいばあちゃんがいちごをたくさん買つてくれて、一しょにおなかいっぱい食べたことがあります。あまくておいしくてうれしかつたことを今でもはつきりおぼえています。

ほかにも、大きいばあちゃんはぼくに自転車を買つてくれたり、お年玉やおこづかいをくれたりしました。何かあるたびに、ぼくのことを思つてくれていたんだなど、今になつてよく分ります。

大きいばあちゃんは、草が生えているとすぐにぬかずにはいられない性格でした。ぼくが遊びに行くと、しゃがんでぬいていることがよくありました。年をとつても自分のことはできるだけ自分でやろうとして、えらいなあと思つていました。大きいばあちゃんが亡くなつてからしばらくたつたある日、ぼくは大きいばあちゃんの家の庭を見ると前より草がのびているのに気がきました。いつも、きれいに

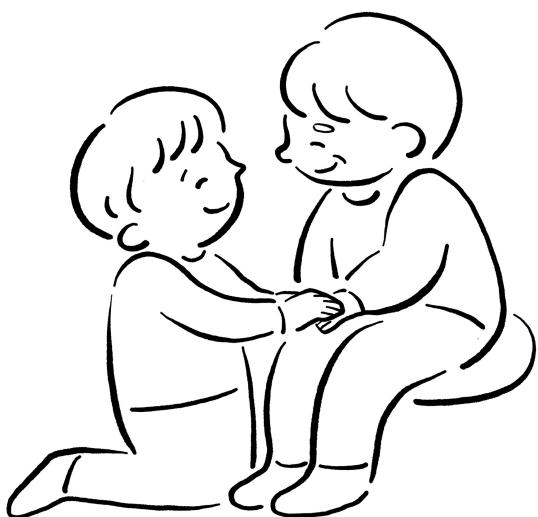
していたのに今はだれもぬいていないんだと思うと、なんだか少し悲しくなりました。だからぼくは「ぼくがぬいてあげよう。」と思い少し草をぬきました。すると大きいばあちゃんが草をぬいていたすがたが頭にうかんできました。大きいばあちゃんを思い出しながら、ぼくもこれからできることを少しづつやつていつて、天国の大きいばあちゃんに喜んでもらいたいと思いました。

大きいばあちゃんは、ぼくのおじいちゃんのお母さんです。おじいちゃんが、買い物や病院につれて行つたり、荷物を運んだりしているのを何度も見ました。家族を大切にするつてこういうことなんだなと思いました。

ぼくのひいおじいちゃんは、ぼくが生まれるずっと前に亡くなつたそうです。大きいばあちゃんは、そのあとずっと一人で生きてきたことになります。百年も生きるということは、すごいことだと思いました。

大きいばあちゃんとの思い出は、これからもずっとぼくの心の中にのこりつづけます。そして、年を

とつても元気にすごせるように助けてくれているデイサービスの人たちのこともすごいと思いました。ぼくも大きくなつたら、だれかの力になれる人になりたいです。



中学生の部 大賞

姉が教えてくれた福祉の心

赤穂中学校二年 室 井 洸 馬

私はダウン症の姉がいる。姉はいつもゆっくりと、自分のペースで生きている。周りが急いでいても焦ることなく、じっくりと物事に向き合う姿は、幼いころから私の目に特別に見えていた。その落ち着いた雰囲気は家族に安心感を与える、ときには慌ただしい毎日の中で「大切なのは、自分の歩幅で進むことだ」と気づかせてくれる。

そんな姉には特技がある。ピアノだ。小さいころから習っていて、発表会では一人で堂々とステージに立つ。大勢の人の前で緊張するどころか、むしろ楽しそうに演奏している。私は人前に出るのが苦手で、一人でステージに立つなんて考えただけでも恥ずかしい。だからこそ、姉の姿を尊敬している。障

がいがあつても、自分の好きなことを思い切り楽しむ強さを持つ姉は、私にとつて大切な誇りだ。

しかし同時に、姉が障がいを持つことで、家族が直面する困難も少なくなかつた。私が小学生のころ、友達から「お姉さんってどんな人」と聞かれても、すぐに答えることができなかつた。姉がダウン症であると説明することにためらいがあつたからだ。「普通だよ」と言葉を濁してしまつたのは、姉を守るためにではなく、私自身が周囲から特別視されるのを恐れていたからだと思う。ある時、思い切つて友達に「姉はダウン症なんだ」と話したことがあつた。すると友達は、「そうなんだ」と普通に答えてくれた。その瞬間、私は肩の力が抜けるような安心感を覚えた。姉の障がいは「壁」ではなく、ありのままを知つてもらえれば理解され、受け入れてもらえるものだと実感できた。

姉は特別支援学校に通い、友達や先生とゆっくりと学習を重ねてきた。できることは少しづつ増えていき、学校での出来事を楽しそうに話してくれる。姉が「今日はみんなで料理をしたよ」と自慢げに語

る姿を見ていると、「社会の中で自分の居場所を持つこと」がどれほど大切なかを感じる。私たち家族も、地域の福祉サービスや支援制度に助けられながら生活してきた。福祉は特別な人のためだけにあるものではなく、誰もが安心して暮らすための「支え合いの仕組み」だということを、私は自然と学んでいった。

それでも、世の中には偏見や無理解も残っている。だからこそ、障がいを正しく理解し、互いに関わる機会を増やすことが、社会の課題だと強く思うようになった。

私は今、将来の進路を考える時期にある。姉と過ごしてきて、私の中で「福祉に関わる道を歩みたい」という気持ちが生まれた。姉のゆっくりとした歩みと、ステージで堂々と演奏する強さは、決して矛盾するものではない。それは「自分のリズムを大切にしながら、社会の中で輝くことができる」という可能性を示している。完璧でなくても、不器用でも、誰もが尊重され、受け入れられる社会であってほしい。

福祉とは、特別な専門家だけが行うものでなく私たち一人ひとりの日常の中にある。困っている人に声をかけること、相手の立場を想像して行動すること、その小さな積み重ねが福祉につながるのだ。姉と一緒に過ごす中で身につけた「思いやりの心」を、私はこれからも大切にしていきたい。



中学生の部 特選

障がいを感じて

赤穂西中学校二年 戸川莉緒

ある日突然の出来事でした。去年の秋、僕のお父さんが仕事中頭を打つて倒れて、高度救命救急センターへ運ばれました。運ばれた時、両手両足を動かさうとしても動かず、手はついているか足はついているかと聞くほどまつたく感覚がなかつたのです。その日、僕が学校から帰ると、おじいさんから、お父さんがけがをして入院をした事を聞いて、とても驚いたことを覚えています。前日までとても元気だったお父さんが動けなくなり、状況によつては危ないと言われる程でした。僕は信じられず、どうなるのか心配でした。

お父さんは、頸髄損傷というけがで、脳が体のあ

のその部分がまひしてしまうこともあるそうです。数日が過ぎ、落ち着いたところでICUから一般病棟へと移りました。けが後初めてテレビ電話をしてみると、いつものお父さんが、ベッドで動けず寝転んだままでした。お父さんは

「こんなふうになつてしまつた。」

と、言いました。僕は返す言葉に困りました。少し間をおいて、

「何しとるん」

と、明るく言いました。お父さんは僕の言葉を聞くと、続けて普段通りの会話をしました。会話の最後、「入院は長くなるから、お母さんの言うことをよく聞いて助けてあげて」

と、言いました。僕はその言葉を聞いて、今後どうなるんだろうと思いました。もう一緒に出かけたり遊ぶことはできなくなるのかとも思いました。

しばらくして、お父さんは手術をすることになりました。それは回復した時、同じけがをしないためです。手術後、主治医の先生が

「不思議ですが動けるようになつていますよ」

と、教えてくれました。その後、スプローンを持ったり歩行のリハビリが始まりました。面会に行つてみると、車椅子に乗つて移動できるようになつていました。僕はお父さんの乗る車椅子を押して院内を散歩しました。お互に慣れないことだけど、僕は車椅子を押すことで、お父さんの役に立てているようで嬉しかつたです。

けがから一ヵ月が経ち、リハビリ病院へ転院することになりました。毎日毎日リハビリをして、歩けるようになつていましたが、手は元通りではあります。バンザイをしようとすると四十度くらいしか腕が上がりませんでした。順調に良くなつてているよう見えましたが、元の姿まではまだまだです。毎日何回もりハビリを頑張つていました。面会へ行くと、車椅子の人や杖をついてゆつくり歩いている人、お年寄りや若い人など色々な人がいました。こんなにたくさんの障がいのある人達を一度に見るのは初めてでした。何日か過ぎ、お父さんに友達ができました。その友達のおじさんは、ある日突然脳出血で倒れたそうです。片手はひじが曲がつたままでいて、

片手は杖をつき、片足をひきずりながら歩いていました。お父さんが障がいのある人と仲良く話しているのを見た時、僕は少し不思議な気持ちになりました。今まで障がいのある人という感覚で見てきた人達が初めてすごく近くの存在に感じたからかもしれません。僕のお父さんも周りから見ると障がいのある人と見えていたかもしれません。でも、僕は障がい者というように感じず、お父さんはお父さんでしかありません。病院でたくさんの患者さんを見てお年寄りや障がいのある人のためにできることなど考えてみても、色々な障がいなどがあつて、困つこともあります。様子を見ていると、僕が思うよりできることが多くて、本当に困ることを分かるのは難しいと思いました。

お父さんは、転院から五ヵ月が経ち退院しました。それでも、リハビリへ通い、今退院から五ヵ月経ちました。手もバンザイもできて、自由に動かせるよ

うになりましたが、目に見えないしひれや痛みはあるそうです。歩いたり走つたりもできるので、見た目は普通の人です。全てが元通りにはならないけれど、ここまで動けるようになったことを家族みんな喜んでいます。

誰でも、突然どんなことが起きるか分かりません。

僕は今元気で不自由なく過ごせていることに感謝して、お年寄りや障がいのある人ない人、困っている人がいれば自然と手を貸すことができて、周りの人たちとも、一緒に助け合うことができればいいなと思います。



温かい社会に

赤穂中学校二年 小野優月

先日、関西福祉大学で福祉体験をさせて頂いた。アイマスクをすると目の前が真っ暗になり、今まで感じたことのない恐怖を感じた。友人が引いてくれる手だけが頼りだつた。目が見え走り、歩くという私にとって当たり前にできることが、障がいをもたれている方にとつて、どんなに大変で難しいことなのかを、この体験を通じて学んだ。そして、その時、友人を頼りにした様に、私も障がいをもつている方が困っていたらすぐに助けたいとその体験を通じて思つた。

その時、私が考えていたのは、5年前に脳出血になり倒れた祖母のことだつた。祖母は、懸命なりハビリにより、病院関係の方も驚くほど回復したが、

中学生の部 入選

左手の中指に麻ひが残り、歩くことも、話すことも
ゆつくりになつた。元気で、話すことが大好きだつ
た祖母が、急に変わつてしまつたので、私は、初め
どう祖母と接していいのか戸惑つた。私は、母にそ
のことを相談すると、

「おばあちゃんは、優月のおばあちゃんで、今まで
となにも変わらないのだから、今までと同じでいい
よ。」

と教えてくれた。だから、私は今までと同じように
接することにした。今までよりも、少しゆつくりだ
けど、母の言う通り、明るくて、優しい祖母は祖母
で、話すのは、とても楽しかつた。祖母には、私を
含め7人の孫がいるが、みんな同じことを考えてい
たのだろう。祖母を囲み、皆で色々な話をして大笑
いをした。私は、祖母がいると、周りの皆が、今ま
でより、温かく優しい気持ちになることに気付いた。
私は、祖母と話すことぐらいしかできることはな
いが、実際に祖母が病院から家に帰り、生活をして
いくことになると、色々な問題が起つた。祖母と
一緒に暮らしていた祖父が、病気で亡くなつてから

は、もつと大変になつた。祖母の生活をどう支えて
いくのか。父の姉弟、家族で何度も話し合いをした。
皆それぞれ祖母の家を離れ生活していることと、今
まで通り自分の家で生活したいという祖母の思いを
どうするか。話し合いの結果、行政の力を借りなが
ら、父、父の姉、弟の交代で、祖母が、できるだけ
長く一人暮らしができるように、祖母の生活を支え
ていくことになつた。

私の家から祖母の家までは、車で一時間以上かか
るので、父も母も大変そうだが、どうすればもつと
祖母が快適に暮らせるのか。できなくなつたことを
どう補うのか。いつも、色々と話し合つてているのを
目にすることになつた。父一人で抱え込むのではなく
く、母、父の姉、弟の家族みんなで話し合えること
で、大変なことでも、前を向いていけるのだと父が
話してくれた。何かあれば行政に相談でき、力を借
りりうことができることも、大きな支えとなつていて
そうだ。

祖母は、突然倒れ、今までの様に普通に生活でき
なくなり、周りの家族の生活も大変になつた。けれ

ど、これは、悪いことばかりではなく、祖母のため

に何ができるか皆で色々なことを話し合い、家族に今までより強い繋がりができた。そして、祖母の気持ちに寄りそうことでの、みんなが今までより、優しい気持ちになれた。

私は、祖母を通して、誰もがいつかは、誰かを支え、支えられる時がくるのだと思った。今は不自由なく暮らしている人も、突然病気になつたり、事故にあつたり、歳をとつて身体が不自由になる時がくることを想定しなければならないと思った。その時に、どんな社会であつてほしいか。一人ひとりが自分のことに置き換える、考えていく必要があると思った。

私は、福祉体験や祖母を通して感じた温かい気持ちをこれからも持ち続け、困っている人がいたら、誰もが助け合える優しい社会になれるように、今、自分ができることを考え、実行していきたいと思う。

みなさんは、福祉について考えたことはありますか。今少子高齢化が進んでいて、高齢者が増え続けています。

私のおじいちゃんは、足の力が入らない難病で家では動くイスを使って生活しています。歩くことも走ることもできないので、よくオセロや花札で遊んでいました。そんなおじいちゃんを見て、もつと高齢者や障がい者が安心・安全にくらせる社会を目指していこう！と考えたときに、どうしたら明るい未来になるだろうと考えたことが三つあります。

一つ目は、「バリアフリーをふやす」ことです。「バリアフリー」とは、段差をなくしたり、スロープをつけたり、車イスにのつている人も安全にくらせることを言います。「バリアフリー」は、今どんどん増えているところが多いと思います。しかし、「バリアフリー」という言葉を知らない人もいると思う

福祉についてもう一度

赤穂東中学校三年 三 宅 美 結

ので、「バリアフリー」という言葉を知っている人が増えれば、もっと「バリアフリー」がふえると思つたからです。

二つ目は、「バリアフリーだけではなく、周りの人もやさしくみてあげる」です。「バリアフリー」をもつとふやすことも大切ですが、障がい者に対して周りの人の目が気になつて、外出できない人が多いと思います。なので、障がい者の人も安心して外出できるようにやさしくみてあげることも大事なのではないかと考えたからです。また、何か障がい者がこまつていそだなと思つたら、「大丈夫ですか。」と声をかけることも大事なのではないかと考えました。もし無視をしてしまつたら、本当にこまつているときだつたら、命のきけんもありうる可能性もあるので、何か障がい者がこまつていたら、勇気をもつて、「大丈夫ですか。」と声かけをすると、障がい者の人も、安心・安全にくらせると思つたからです。

自分のことだけを考えて行動するのではなく、周りのことも考えて行動する人のことを言います。まだ社会では、「みんなの幸せ」を考えて行動している人は少ないといます。「みんなの幸せ」を考えて行動してくれる人が増えると、例えば、何かこまつている障がい者的人がいたら、助けてあげたり、気づいたことがあればすぐに人に相談したり、たくさんのがんのメリットがあると思います。なので、みんなが、「みんなの幸せ」を考えて行動して、今後社会がより明るい社会と、障がい者の人や高齢者の人や子どもでも、安心・安全にくらせる社会を目指せるのではないかと思つたからです。

今後、「少子高齢化」がどんどん進んで、高齢者も多くなつていくと思います。今後社会が「福祉」についてもう一度考えて、より障がい者の人や高齢者の人でも安心・安全にくらせる社会を目指せるのかまだ分からぬところがたくさんあるけど、「みんなの幸せ」を考えて行動してくれる人がふえることを願つています。また、外国人も増えて日本の「福祉」について知らない人が多いと思うので、外国人を見て行動していくことです。「みんなの幸せ」とは、

でも分かりやすいような工夫も今後未来につながることができるのではないかと考えたからです。

これから、明るい社会で、障がい者や、高齢者も安心・安全にくらせる社会になつていてることを願っています。



中学生の部 佳作

お兄ちゃんの右腕

赤穂中学校一年 古川 よつ葉

私にはお兄ちゃんがいます。お兄ちゃんは私より十七歳年上で、私が小さいころからずっと大人のような存在でした。

お兄ちゃんには右腕がありません。私が二歳のときには仕事の事故で失つたそうですが、私はその時のことを見ていません。だから、私が物心ついたときには、すでに「お兄ちゃんは片腕で生きている」というのが当たり前の光景でした。

小さいころの私は、そのことをあまり深く考えませんでした。お兄ちゃんはいつも優しく、遊んでくれたり、学校の話を聞いてくれたりしました。だから「腕がない」というより、「いつも笑っているとつても優しいお兄ちゃん」という印象の方が強かつた

のです。けれども大きくなるにつれて、片腕なのに車の運転や仕事をすることが大変と思いました。

ある日、一緒に買い物に行つたときのことです。すれ違つた子どもが「腕がない！」と指をさして大きな声を出しました。私はとてもびっくりして同時に胸が痛くなりました。お兄ちゃんは笑つてごまかしていましたが、私は「人の体の違いをからかつたり、大きな声で言つたりすることは、どれほど相手を傷つけるのか」をそのとき初めて実感しました。悪気がなくとも、無神経な言葉や態度は人を深く傷つけてしまうのだと思いました。

お兄ちゃんは明るく生きていますが、きっと心の中ではたくさんの苦労や悩みを抱えていると思います。そして、社会の中にいるいろいろな人たちも、きっと似たような気持ちで生きているのではないかと考えるようになりました。体に障がいがある人もいれば、病気を抱えている人もいます。見た目には分からなくても、心の中で苦しんでいる人もいます。その人たちが安心して生活できる社会にするには、周りの人の思いやりがとても大切だと思います。

私は、学校でもつと「人との違いについて考える授業」が増えたらしいと思います。例えば、障がいのある人がどんな工夫をして生活しているのかを知つたり、実際にお話を聞いたりする機会があれば、無神経な言葉や差別を減らすことができると思います。知らないからこそ怖がつたり、からかつたりしてしまうのだと思うからです。知ることは、相手を尊重するための第一歩だと思います。

また、街の中でも、もつと安心して暮らせる工夫が必要だと思います。段差をなくしたり、音声で案内してくれる信号を増やしたりすることも大切ですが、それ以上に大切なのは「人の心」だと感じます。困っている人を見かけたときに「大丈夫ですか」と声をかける勇気、電車で席をゆずる優しさ、そして人の違いを自然に受け入れる人の気持ち。そういう小さな心の動きが集まつて、社会はもつと生きやすくなると思います。

私はお兄ちゃんを通して、人権とは「特別な誰かのためにあるもの」ではなく、「すべての人が大切にされるためのもの」だと学びました。人はみんな

違います。その違いを認め合い、安心して生きられる社会にすることこそ、人権を守るということだと思います。

これから私は、困っている人を見かけたら勇気を出して声をかけられる人になりたいです。そして、学校や地域の中で、相手を尊重する気持ちを忘れずに生きていきたいです。

かけがえのない命を守るために

赤穂西中学校三年 前田 斗優真

僕には祖父がいません。僕が生まれる前に父方、母方の祖父が亡くなつており会つたことがありません。しかし生まれた時から可愛がつてくれている曾祖父がいます。その曾祖父も今年の六月で百才を迎えた。百才になつたこの夏も僕の野球の事を気にかけてくれながら元気にすごしています。

七年前に九十四才で曾祖母が天国に旅立ちまし

た。それまで九十三才の曾祖父と僕の祖母が介護をしていました。二人は九十を過ぎるまで本当に仲が良く、どこへ行くのも二人で一緒に、僕の家にもよく遊びに来てくれ、とても可愛がつてくれました。

九十を過ぎ、曾祖母は足腰が弱くなり、車いす生活。さらに、認知症もひどくなり、曾祖父を困らすようになつてしまつたそうです。

「老老介護」高齢の夫が高齢の妻の介護。大変という言葉で言い表すことができなかつたそうです。さらに、祖母も六十を過ぎていたので、二人で協力して曾祖母の介護を行つていきました。曾祖母の認知症は日を重ねるごとに悪化し、「おふろに入れて」と祖母を困らす日が多くなつてきたそうです。「デイサービスで入つてきたやろ」と言つても、「入つていない」と何回も言つていたそうです。

そんな話を聞いていると、曾祖父と祖母が倒れないかと僕の母は心配していました。「曾祖母、曾祖父、祖母を少しでも元気づけたい」と思い、僕たちは毎週のように行つていました。僕には妹がいます。当時一才。子どもが大好きな曾祖母は妹を見て、

何度も何度も「可愛いなー」と笑顔で話しかけてくれてました。その笑顔を見て、曾祖父、祖母そして私たち家族は、幸せだつたし、一番安心できた時間でした。そして九十四才で曾祖母は天国へ旅立ちました。

曾祖父は曾祖母が亡くなつてから元氣がありませんでした。コロナ禍とすることもあり自由に外出することがへり、少し物忘れが増えたように感じると祖母が言つていました。

それから曾祖父も嫌がつていた、デイサービスに通うようになりました。

「まだまだ元気でおらなあかん」と体を動かしたり、友達とお話ししたり、楽しい時間をすごしているようです。

デイサービスに行くことにより、曾祖父も元気を取り戻し、祖母は少しだけ、自分の時間を作ることができ、気持ちが楽になつたそうです。

今の時代、老老介護が増えている中、デイサービスという場所は、時間に余裕ができたり、心に余裕を持てたり、色んな人を救ってくれます。僕たちの

曾祖母、曾祖父、祖母も救われた一人です。

ニュースでよく介護疲れで大事な人を殺してしまった。そんなニュースを目にします。そんな事件が起らぬよう、デイサービスという場所を頼つて、気持ちに余裕がもてて、楽しく介護ができる。そんな世の中になつてほしいと僕は思います。たくさんの人々が救われますように。

生きるとここと

赤穂東中学校二年 平 田 京 真

僕には、岡山に住むひいじいちゃんがいました。

休日には、おじいちゃんと僕達家族一緒に岡山へ会いに行つていました。ひいじいちゃんは施設に入つていました。僕が生まれるずっと前に脳卒中で倒れたことを聞きました。それまでは、自宅で元気に過ごしていたのに、お店で急に倒れて意識がなくなり、右半身麻痺が後遺症となつて、ほとんどベッドで過

ござないといけない状態になりました。

僕達が会いに行くと、ひいじいちゃんは動けない体を精一杯動かそうと、必死にベッドの柵をつかまり、僕が来たことを喜んでくれます。後遺症で言葉が出しにくいけど、一生懸命に僕達に話しかけてくれます。僕達はなんとかそれを聞き取ろうとするけど、分からないことの方が多くて、聞き返したり笑つて聞き流していました。ひいじいちゃんは、それを気づいていたかもしません。かわいそうでした。動けないし、しゃべりにくいし、自由な生活ができないので、ひいじいちゃんは施設の職員さんに、いつも明るく身振り手振りで伝えていたり、車椅子に乗せてもらつて体操を楽しそうにしていたり、前向きに過ごしている姿を見ていました。思うように体が動かなくて、悲しくて辛いこともたくさんあるだろうけど、ひいじいちゃんの強さはすごいと思いました。

でも、ある時おじいちゃんが教えてくれました。ひいじいちゃんは倒れて意識が戻った後、自分の現実を受け止められなくて、これから先も不自由な身

体になるという事も、周りの人や家族に迷惑をかけるようになる事も、いろいろな壮絶な思いが込み上げて、よく泣いていたそうです。僕はそれを聞いただけで、胸が締めつけられる思いでした。笑つて僕を出迎えてくれるひいじいちゃん、どんな思いでどうやつて乗り越えて、また前向きに生きていこうとできただろう。施設の職員さんは、岡山弁でひいじいちゃんにいつも明るく接してくれていました。ひいじいちゃんがこうしてほしいとすることを、丁寧に聞きとつてくれていました。ひいじいちゃんがなるべく自分で取りやすいように、ベッドの近くに必要な物を置いてくれたり、聞き取りやすいようにゆっくりしゃべってくれたり、僕達が帰る時は近くのエレベーターまで見送るために、ひいじいちゃんはその度に職員さんに「ありがとう」と頭を下げていました。ひいじいちゃんを前向きに元気にしてくれているのは、こうやつてずっと関わつて助けてくれている職員さんのおかげなんだと思いました。介護のお仕事は、力もいるし、優しさも、気の

利いたことも、たくさんパワーもいるけど、ひいじいちゃんのような助けがない生きられない人は、無くてはならない大事な大事な仕事なんだと思います。

ひいじいちゃんは、肺がんになり、どんどん痩せて亡くなりました。よく頑張ったね、一生懸命生きてくれてありがとうございました、と家族で別れを告げました。

元気でいることが当たり前ではない。元気だった人が突然病気になつたり、事故で不自由な身体になつたり、死んでしまうこともあります。今は若い僕達も、生きている限り必ず歳をとります。ひいじいちゃんのお世話をしてきたおじいちゃんも、いつまで元気でいてくれるだろう。生まれた時から僕の世話をしてくれて、いつも応援してくれて必ず助けてくれるおじいちゃんも、いつか：と思うと、生きていることに心の底から感謝しないといけないと思いました。そして、最期までひいじいちゃんの助けをしてくれた介護士さんのように、人から必要とされる人間に、誰かの役に立てる人間に、僕もなれるよう頑張りたいです。

支えられて生きるといつと

坂越中学校一年 花 崎 蒼 空

僕は三十五週六日で生まれました。母は僕を妊娠してすぐに体調を崩し、長い間入院していました。毎日、点滴や検査を受けながら、無事に僕が生まれてることだけを願つていたと聞きます。母は病室のベッドの上で「ちゃんと育つだろうか」「無事に産んであげれるだろうか」と不安で泣いた日もあつたそうです。だからこそ、僕が生まれたとき、母は小さな体で泣いている僕を見て「生きててくれてありがとう」と心から思つたと話してくれました。僕は生まれた時から、すでに人の愛に守られていたのだと思います。

けれど成長するにつれて、僕は周りと違うところがあると分かりました。僕は自閉症スペクトラム障がい（A S D）です。人と話すことが苦手で、気持ちを伝えるのが下手でした。友達が笑っているときには笑えなかつたり、場の空気を読めずに変なことを

言つてしまつたりすることがありました。すると、「なんでそんなこと言うの」と笑われて、心が痛くなることがありました。「やっぱり僕は普通じゃないのかな」と悩む日もありました。

そんな僕に母はいつも言葉をかけてくれました。「あなたはあなたの今までいいんだよ。入院中、どんなに苦しくても生まれて来てくれるのを願つていた。生きていてくれるだけでうれしいんだよ」と。母のその言葉に、僕はどれほど救われたか分かりません。母にとつて僕は、完璧でなくとも、周りと違つても、大切な存在だと気付きました。そして僕自身も、少しづつ「僕は僕でいい」と思えるようになつてきました。

学校でも僕を支えてくれる人達がいます。授業で指示をすぐ理解できないとき、隣の席の友達が「こうしたことだよ」と教えてくれたり、先生が「自分のペースで大丈夫だよ」と言つてくれたりします。その一言があるだけで、僕の心は軽くなります。人の優しさは、相手を安心させ、居場所をつくつてくれるのだと学びました。

人権とは「誰もが大切にされる権利」です。僕は早く生まれたけれど、大切にされました。A S Dで人と違うけれど、大切にされています。それは当たり前のことではなく、多くの人の思いやりに支えられて実現しているのだと実感します。人は誰もが違う存在です。違いがあるからこそ助け合えるし、新しい考え方や強みも生まれます。違うことは欠点ではなく、その人らしさだと気づきました。

これから僕の目標は、まず「自分を否定しない」こと。そして、悩んでいる人や孤独を感じている人に「あなたはの今までいい」と伝えられる人になりたいです。ほんの一言でも、相手を支える力になると信じています。

人権を守るというのは特別なことではありません。日常の中で相手を思いやり、大切にすることです。僕は母に支えられて生まれ、友達や先生に支えられて育っています。だからこそ、今度は僕が人を支えられるように生きていきたいです。誰もが安心して「自分らしく」いられる社会を作ること。それが、僕が大切にしていきたい人権だと思います。

高齢者のこれからの中未来

有年中学校三年 小河拓夢

今の日本は急激に高齢化が進んでいます。学校の教科書やニュースでもよく聞きます。高齢者が多く、若者が少なくなつていくと、支える人が少なくなつていき、高齢者が過ごすのがとても大変になります。またそうなると家族の誰かが介護をしようとしますが、仕事と両立もしなければいけないのでその人の負担も多くなります。それをみた高齢者は迷惑をかけたくないと思い、頼らなくなると思います。そういう助け合つたり、助けられたり、といったものがなくなると、体が不自由な高齢者や障がいをもつた方がしんどい思いをすることになってしまいます。ですがそんな人はいてほしくないと僕は思います。

高齢者が増えたことで社会への負担が多くなっています。ですが問題になつてているのは介護だけではありません。さつき言つたように高齢者は家族に心配をかけたり、迷惑をかけたくないと、家族を頼ら

なくなると思います。人間誰しも一人で生きるのは辛いと思います。僕はそういう辛い思いをする人がいることがとても悲しいです。

そういうことをなくすためには地域の人との協力が必要だと思います。地域の人と仲良くなり、話し相手を作ることで一つの楽しみになり、そういう辛い思いをする人が少なくなると思います。僕が住んでいるところは地域の交流が深く、よく話しているところを見ます。話しているところを見ると笑顔で楽しそうです。そういうところを見ると温かい気持ちになります。

僕の祖母はグラウンドゴルフをしています。家でもこんなことができたと、本当に楽しそうに話します。誰に対しても楽しく話しているので本当に楽しんだなと思います。グラウンドゴルフをしている人たちとも交流ができる、地域の交流もできていると思います。本当にそういう場があるところはとてもいいところだと思うし、大切な場所だと思います。その場所をいつまでも大切に守っていきたいです。祖母の生きがいになつてていると思うので、いつまで

も続けてほしいです。

人はだれでも年をとります。だからこそ、お年寄りや体の不自由な人を思いやることは、いつか自分が助けてもらうことにもつながると思います。今の社会には大変なことも多いけれど、みんなで少しづつ力を出して、思いやりをもてば、暮らしやすくなると思います。僕もこれから、自分にできる小さなことを大切にしていきたいです。



高校生以上の部 大賞

弟と成長する上で気付いたこと。

赤穂高等学校一年 進 藤 そ ら

私は小さな頃から福祉というものが身近にある環境で育ちました。私の弟は自閉症スペクトラムという障がいを持っており、生活はどうしても弟中心に回ることが多く、大変だと感じることも少なくありませんでした。しかし弟が生まれてからのこの十年間で、私自身の心の成長や日々の生活の中で得られたものもたくさんありました。

弟には聴覚過敏という特性があり、周りの人とは少し違う音の聞こえ方をします。花火や雷などの大きな音、人混みのざわめきがとても苦手で、嫌な音を聞いた時には、目眩や頭痛が起き、ストレスでじんましんが出てしまうことがあります。最初は私もなかなか理解できず戸惑いましたが、それが弟に

とつての「生きづらさ」であることを知り、同じ出来事でも人によって受け取り方は全く違うのだと気づきました。

一方で、弟には私にはできないような素晴らしい特技があります。絶対音感を持ち、好きな歌を一度聴いただけでピアノで弾くことができます。それに加えてリズム感も非常に優れており、身体を使って左右や上下で違うリズムを同時に取ることもできます。こうしてハンデを持ちながらも自分らしさを大切にして強く生きる弟の姿は、いつも私や家族に元気を与えてくれます。

私は、弟が生まれるまでは福祉というものに全く興味がありませんでした。幼稚園の頃から老人ホームなどの福祉の現場に足を運ぶ機会はありましたが、それらを深く知ろう、とは思いませんでした。しかし、弟が生まれてからは違いました。出生前検査で弟に障がいがあることが分かり、そこで初めて「福祉とは何なのか」を知ろうと思うきっかけになりました。私は当時小学一年生で福祉の知識は全くありませんでしたが、弟のために何かできることは

無いかと思い、図書室で本を読んだり、周りの大人にたくさん聞きました。ここから、私の将来の夢である福祉関係の職業に就きたいという思いが芽生えました。

そんな弟の成長を見守る中で気付いたことがあります。それは「人はみんな違っていてその違いを理解してあげることが大切である」ということです。障がいがあるから可哀想だという固定概念に囚われず、一人の人間として尊重し、その人らしさを大切にしてあげることが本当の福祉であると感じました。また、周囲の人が理解や配慮してあげることで障がいの有無関係なく、誰もが自分らしさを出して生きやすい社会になっていくと学びました。

将来、私は福祉関係の職業に就きたいと考えています。弟と過ごしてきた経験を生かし障がいを持つ人やその家族が安心して暮らせる社会を作る手助けをしたいと考えています。近年、障がい者施設や支援学校で職員が障がい者をいじめる問題が報道されることがよくあります。私はこれは絶対見過ごしてはいけない深刻な問題だと思います。障がいを持つ

子どもや大人を施設に預ける保護者は、その施設を信頼してこそ託しているのに、その信頼が裏切られてしまうのはとても心が痛みます。これは利用者と職員との信頼関係を大きく損なうものだと思います。だからこそ私は人間として最低な行為が決して起らぬ安心できる福祉施設を立ち上げたいと思っています。

これからも私は福祉の学びを深め、夢に向かって努力していきたいです。そして、こんな素晴らしい夢を持たせてくれた弟には本当に感謝しかありません。



高校生以上の部 特選

温かい目で

一般 西山千賀子

夫の病気は前頭側頭葉変性症・意味性認知症です。主に若年期に発症することが多い病気です。病気の症状から推測すると夫は50代前半で発症したと思われます。発病してからおよそ10年が経ちます。国で指定難病に認定されています。この病気は日本ではほとんどないとのことです。脳の前頭葉と側頭葉が萎縮する病気で夫の場合は側頭葉の右側が強く萎縮し、人物や言葉の意味を理解することが難しく意味記憶障がいとされています。

発症初期は物品集めから始まり、些細なことで怒ったり、場にそぐわない態度をとったり、他者への共感ができないなどの人格変化や社会的なルールやマナーを無視するなどの行動障がいがあり、固執

することが多々見られ、また毎日同じ時間に同じことを繰り返す常同行動も見られました。しかし、困ったことにそれらの行為や行動には本人の自覚がありませんでした。ですので当時勤めていた職場の方々並びに仕事関係の方々には大変ご迷惑をかけてしました。病識なく今に至っています。ただ記憶は当時保たれています。1人で外出し遠方まで徒歩や自転車で出かけてしまい日が暮れても家には戻らず心配して探し回ったことが何度かありましたが、必ずひとりで家に帰つて来ました。この病気は迷子になることは少ないそうです。

発症から数年後、知人や親戚の人に会つても、全員ではありませんが、誰だかわからず顔も名前も「知らない」と言つていました。又、目に付く所にある食べ物や、冷蔵庫にある飲み物の他、液体の調味料まで飲んでしまいました。自分の薬ではない薬を飲んでしまったこともあります。

今では自ら発する言葉は少なく限られています。声も小さくなりはつきりと喋ることができません。意思疎通が難しくなりました。家では「どこ行く

ん？」の言葉を何度も私に言つてきます。歩くことはできますが思うように体を動かすことは難しくなり表情も乏しく笑うことがなくなりました。何をするのにも介助が必要になつてきました。緩徐進行性でいざれ歩けなくなるそうです。

使える資源を使わせていただいています。3年前からデイサービス、障がいサービス、そして去年末からは施設が決まるまでですが、病院でのレスパイト入院です。これらによつて日々の私の負担は随分軽減しました。職員の方々が笑顔で対応して下さり夫の世話をよくして下さり、ありがたく思いました。デイサービスでは夫の病状で困ったことがあります。デイサービスでは夫の病状で困ったことがあります。対応の仕方なども教えて下さりとても助かっています。

病気の影響で様々な動作や体の微妙な動き同じ言葉を繰り返し言います。外出すると、「うん？ 何？ この人」という不思議な目でよく見られたように私は感じました。無理もないかもせんが、本人にとつても家族にとつてもつらく悲しい気持ちになります。身近な人が障がいを持つて初めてわかるこ

とも多いです。見た目ではわからない方もおられます。障がいを持っている人に接したことのない人はなかなか理解してもらえないかもしれませんが、『なにか不自然だなあ』と思われたらこの人は何かの病気か障がいがあるのかな。と気付いていただき自然体で普通に接していただきたいと思います。病気や障がいをかかえている人は自分がなりたくてなつたわけではありません。病気や障がいを持つている全ての人達、そしてその家族の人の気持ちも考えてどうか温かい目で普通に接してくれればと願います。また子どもさんにも親御さんから「あの人は病気かもしれないね。でも一生懸命頑張っているね」と教えていただければと思います。そういう私自身も世間の人達を意識しながら温かい目で見ていくように注意を払いたいと思います。

高校生以上の部 入選

福祉

赤穂高等学校一年 角 南 那 奈

私は「福祉」という言葉を聞くと、まず「誰かのために何かすること」というイメージを思い浮かべる。しかし、本来の福祉は特別な人のためだけに存在するものではなく、社会に生きるすべての人が互いに支え合いながら、安心して生活できる仕組みを指していると思う。高齢化や核家族化が進む現代において、地域に根差した支え合いの福祉の重要性を私は強く感じている。

少子高齢化が進む日本では、医療や介護を必要とする高齢者が急速に増加している。家族だけで介護を担うことは難しくなり、地域や行政の支えが必要不可欠となっている。また一方で、障がいを持つ人々や病気で日常生活に制約を抱える人々も、同じ地域

に暮らしている。これらの人々が孤立せず、地域の一員として安心して暮らすためには、制度だけではなく「人と人とのつながり」が大切。

私の住む地域でも、町内会やボランティア活動が行われており、買い物に付き添つたり、話し相手になつたりするだけでも孤独感を和らげる大きな支えになると聞いた。こうした活動は専門的な知識がなくても誰でも参加でき、ちょっとした心配りが人の生活を大きく支えているのだと思う。福祉とは決して大げさなものではなく、「声をかける」「助け合う」といった小さな行動の積み重ねで形づくられていくものだと感じる。

私自身、学校のトライやるウイークで高齢者施設を訪問し、入居者の方々と会話やゲームをした。最初は「自分に出来ることはあるのか」と不安だったが、利用者の方が笑顔を見せてくれた瞬間に、その不安は消えた。少しの時間でも誰かの気持ちを明るくできることは、自分にとつて大きな喜びとなつた。同時に、福祉は与える側と受ける側という一方通行ではなく、互いに心を通わせる双方の関係であるこ

とを学んだ。

これからの中では、テクノロジーの発展も福祉を支える大きな力となる。たとえば介護ロボットや見守りセンサー、オンラインでの相談サービスなどは、負担を軽減し、支援を必要とする人にとって心強い存在となるだろう。しかし、機械や制度だけでは人の心を満たすことはできない。だからこそ「人が人を支える」という原点を忘れてはならないと思う。

福祉を考えることは、結局「自分がどのように生きたいか」「どのような社会を未来に残したいか?」という問いにつながっている。誰もが年を取りいかは、支えられるため、そのときに安心して生きられる社会を築き、今を生きる私たちの一人ひとりが「支える側」として関わりを持つことが大切だと思う。

福祉とは特別な人が行う仕事ではなく、誰もが担い手になれる身近な営みである。私はこれからも地域の一員として支え合いの行動を大切にしたい。

思いやりのある社会

赤穂高等学校二年 入 潮 圭 祐

私たちが暮らす社会には、年齢や体の状態に関係なく、さまざまな人が共に生活しています。その中には、年を重ねて体の自由がきかなくなつた高齢者や、生まれつき、あるいは事故や病気によつて障がいを抱える人たちもいます。日々の生活の中で、彼らが困難を感じる場面は少なくありません。だからこそ、私たち一人ひとりが「思いやりの心」を持つて接することが、福祉社会を実現するために必要不可欠なのです。

私は以前、地域の福祉施設で行われたボランティア活動に参加したことがあります。そこでは、高齢者と車いすの障がいの方々と一緒に折り紙や歌を楽しむ時間が設けられていました。最初はどう接したらよいかわからず戸惑つていた私でしたが、あるおばあさんがにこやかに話しかけてくださつたことで、緊張がほぐれました。ゆっくりとした会話の中で、

彼女の若い頃の思い出や今の生活について知ることができ、とても心が温かくなりました。

また、車いすを使っている方のお手伝いをした際には、少しの段差がどれほどの障がいになるかを実感しました。普段、健常者である私たちは気づかないことが、彼らにとっては大きな壁となっているのです。この体験を通じて、「気づくこと」が思いやりの第一歩であると学びました。

思いやりとは、特別なことをするのではなく、相手の立場に立つて考え、行動することだと思います。

道で困っている高齢者を見かけたら声をかける、エレベーターで車いすの方が乗れるようにスペースを空ける、視覚障がいの方が横断歩道で立ち止まつていたら手を貸す。こうした小さな行動が、思いやりにつながります。

しかし、思いやりの心を持つていても、正しい知識がなければ相手を傷つけてしまうこともあります。たとえば、過剰な手助けが相手の自立を妨げてしまったり、無意識に差別的な言葉を使ってしまったりすることがあります。だからこそ、福祉について

ての学びや、障がいに対する正しい理解も必要なのです。

近年、「ユニバーサルデザイン」という言葉をよく耳にします。これは、すべての人が使いやすいよう設計された製品や建物、サービスのことを指します。たとえば、誰でも使いやすい駅のトイレや、音声案内のついたエレベーターなどがその一例です。社会全体が思いやりの心をもつて設計されることで、誰でも安心して暮らせる環境が整つてきます。

また、学校や家庭でも、日頃から思いやりの心を育てることが大切です。友達が困つていたら助ける、違いを受け入れる、誰にでも優しく接する。こうした日常の積み重ねが、やがて社会全体の温かさにつながります。

私たちは皆、いつかは年を取り、誰かの支えを必要とする日が来るかもしれません。障がいもまた、誰にでも起こり得るものです。だからこそ、他人ごとではなく「自分ごと」として、老人や障がい者とどう関わっていくかを考えることが必要だと思います。

ます。

福祉とは、特別な人のためだけのものではありません。すべての人が安心して暮らせる社会をつくるための仕組みであり、その中心には「思いやりの心」があります。これからも、私は日々の中で、誰かの立場に立つて行動できる人間でいたいと願っています。そして、思いやりの輪が少しずつ広がっていく社会を、皆で築いていきたいと思います。



高校生以上の部 佳作

ひいおばあちゃんからもらった夢

赤穂高等学校二年 内 藤 真 白

私は今年103歳のひいおばあちゃんがいます。

ひいおばあちゃんの元気の秘訣は規則正しい食事と毎朝の散歩だそうです。ひいおばあちゃんは我が家に遊びに行くと、「よう来ててくれたな。」「まーちゃんの笑顔を見ると元気が出る」と言ってくれて、ごはんを作つて出迎えてくれます。私の家族も親戚もみんな大好きです。そんな元気なおばあちゃんも体調を崩してしまった事が増えました。家の中の段差を無くしたり、週に一回お母さんがひいおばあちゃん家に行つたりしています。私は、学校や勉強などで行ける時は少なくなつてしまつたけれど、月に1回は会いに行きます。

今は、月1回ホームヘルパーさんに来てもらい、日常生活のサポートをしてもらいお話をしているそ

うです。私は、ひいおばあちゃんの体調が悪い時、このまま寝たきりになってしまったら大丈夫かなと、とても心配で眠れない時もありました。けれど、ゆつくりと元気になつて今では一人で全てこなしています。

私のおばあちゃんのよう、体調が悪くなつたらすぐに介護に来てくれる今の日本は素晴らしいと思います。ですが、今は高齢化社会になつてるので人手が少なかつたり等、さまざま問題があります。町中で歩いていたりしても、ここに手すりがあればもつとみんなが歩きやすいなと思つたりすることも多々あります。日本の高齢化社会は今でもどんどん進んでいますが、私達まだ若い人達がおじいちゃんやおばあちゃんに元気に暮らしてもらえるように全力を尽くす事が大切です。私は、2年ほど前に友達といふ時、目の前にいたおばあさんが倒れてしまい、どうしたらしいのかなとなつてしまつたけれど、救急車に電話をして、助ける事が出来ました。細かい

事でも、地域の人々と助け合う事で助かる命があるのだと気づけました。

私は小学生の時、ひいおばあちゃんとお泊まりして、毎回私が大好きなカレーを作つてくれて、いつもにお風呂に入つて、小さなベッドで色々な話をしながら寝たり、そんな楽しい思い出が数え切れないぐらいあります。今は、私の予定が中々合わなくてお泊まりは出来ていません。ですが、もし次お泊まりする時は、私がご飯を作り、おいしいおいしいと食べててくれるようなご飯を作つてあげたいです。

私に今までしてくれた嬉しい事を、ひいおばあちゃんに恩返ししていきたいです。

日本は現在も高齢化社会が進んでいますがこれから先何かお年寄りの方達のためにできるボランティアなどがあつたら、積極的に参加して誰かの力になりたいです。誰かの役に立つ事が大好きな私なので、将来「看護師」になりたいです。お年寄りの患者さんから小さい子達まで、一人一人に寄り添い、たくさんの命を救いたいです。治療するだけでなく患者さんが不安な事など相談も乗つてサポートしたいで

す。大人になり、「看護師」になれたら、ひいおばあちゃんに一番に伝えたいです。そう思えるひいおばあちゃんに、今私が出来る事を精一杯していきます。



この冊子は、共同募金の配分金で
製本いたしました。

ご意見、ご感想等ございましたら下記までご連絡下さい。

〒678-0232 赤穂市中広267
赤穂市社会福祉協議会(総合福祉会館内)
TEL(0791)42-1397／FAX(0791)45-2444
E-mail ako-shakyo@ako-shakyo.jp

福祉作文

令和7年12月発行

編集・発行：社会福祉法人 赤穂市社会福祉協議会

